

イチゴベンチ育苗におけるチリカブリダニによるハダニ防除

はじめに

チリカブリダニ(写真)はハダニを食べて増殖するダニであり、1995年に施設栽培イチゴに登録された生物農薬です。ボトルに入れて販売されており、イチゴの株の上から10a当たり1本(2000頭以上)を振りまいて使用します。

チリカブリダニの問題点

チリカブリダニは、(1)化学農薬のように散布してからすぐに効果があらわれない(2)化学農薬に弱く、他の農薬を散布しにくい(3)20から30の比較的高温では活動するが、15以下の低温では動きが鈍い(4)餌のハダニが減少すると逃亡したり共食いをして減少する等の欠点があります。

これまで奈良県内では、イチゴの促成栽培で10月からチリカブリダニを入れても、すぐに寒くなって活動能力が劣ることや影響のある農薬を使用することが多いため、実際に圃場で使用する事は少なかったようです。

網室内の育苗期での利用の検討

育苗期は気温が高くチリカブリダニの活動が

活発な時期であり、網室であれば他害虫も発生しにくく、チリカブリダニを活用できる条件がそろっており、網室内のおがくずベンチ育苗圃での活用法を検討しました。

育苗期のハダニ発生初期の7月上旬に、親株1株当たり5頭から20頭を放飼すると、1週間後から1ヶ月後にはハダニが減少し、防除効果が見られました(図1)。放飼後にチリカブリダニも増加しましたが、ハダニが減少するとチリカブリダニも減少しました(図1)。

利用のポイント

親株と子苗のハダニ密度には高い相関関係がみられ(図2)、観察しやすい親株だけを調査しても発生初期を確認する事が出来ます。イチゴのおがくずベンチ育苗は、気温が25~30と高く、湿度も80%以上の時間が長く、チリカブリダニの活動に適しています。

育苗期は茎葉が繁茂して薬剤散布による防除が難しく、薬剤抵抗性の発達を抑制するためにも、チリカブリダニによる防除法は有望です。

(虫害防除チーム 福井俊男)

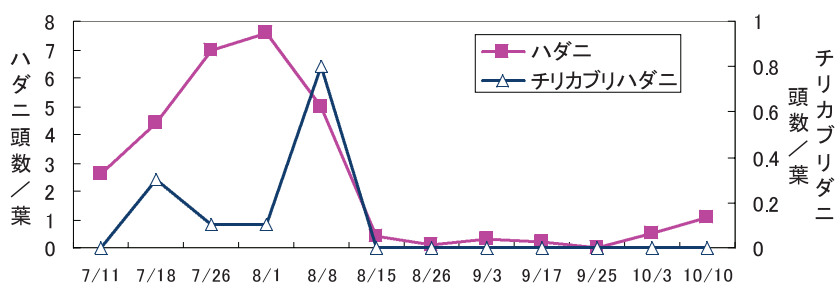


図1 チリカブリダニの放飼によるハダニ防除

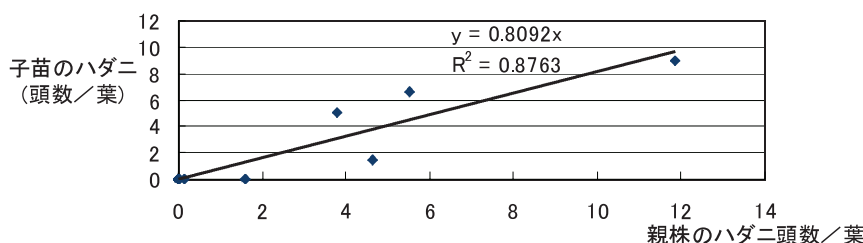


図2 イチゴ育苗の親株と子苗のハダニ寄生密度の関係(2000年)

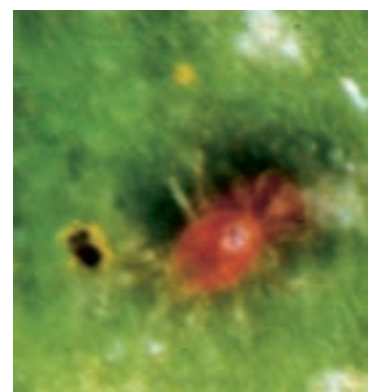


写真 ハダニ(左)を食べるチリカブリダニ(右)